

つくば探索10年

つくばサイエンス・アカデミーの活動を振り返って

有限会社ゼン・コミュニケーションズ(ゼンコム)
代表取締役

おかやま

岡山

よしこ

善子

「筑波研究学園都市」をベースとし、研究者の横断的かつ緩やかな異分野交流の場を7年にわたって提供してきた「つくばサイエンス・アカデミー」をご存じでしょうか。

つくばサイエンス・アカデミー (Science Academy of Tsukuba: 略称 SAT, 江崎玲於奈理事長) は、2000年11月に設立された個人会員を主とする組織(任意団体)である。筆者は、このSATの設立以前から「つくば」にかかわり、SAT誕生とその後の活動を、事務局の一員として手伝ってきた者である。

現在、わが国が成熟社会となった背景には、戦後を通じての一貫した経済重視政策とともに、“国策”として「科学技術立国」を目指す流れがあったといえる。その大きなエポックメイキングが筑波研究学園都市の設立であることは、論をまたないであろう。1963年の閣議了解以来、約40年の歴史を持つ「つ

くば」は、今日、37の国などの研究・教育機関をはじめ、民間を含む約300の研究機関・企業が立地し、約1万2000人の研究者を擁するわが国最大のサイエンス・シティとなっている。

しかし、「科学技術立国」の流れは、時代を追ってそのつど変化をしているように思う。研究者ではない一般的な見方であるが、「つくば」設立当時から掛け声があった「産学官連携」は、80～90年代に実質的な形を取り始めた。そして、産業構造の変化に伴い、「知をめぐる国際的な競争」への対応の重要性がうたわれ、今また、「イノベーション」が科学技術振興策の重要なキーワードとなっている。

こうした流れのなかで、「つくば」が果たしてきた役割とその成果はもちろん大きなものである。一方で、その「知」の集積や歴史

第1表 筑波研究学園都市と海外リサーチパークの比較

リサーチパーク	国・所在地	開発規模	備考
筑波研究学園都市	日本茨城県つくば市・ 研究学園特区約7万5,000人 (周辺開発地区を合わせ約20万1,000人) 2007年1月現在	約2,700ha (研究学園特区) (周辺開発特区) 2万5,700ha)	東京から約60km, (つくばエクスプレスで秋 葉原から45分) 成田国際空港から約40km
スタンフォード・ リサーチパーク	米国 カリフォルニア州パルアルト市	約300ha	サンフランシスコから車で 1時間
リサーチ・トライアングル・ パーク	米国 ノースカロライナ州3市の中心地	2,730ha	同州3市から車で20分
ユタ・リサーチパーク	米国 ユタ州ソルトレイクシティ	129ha	市の中心地域
ケンブリッジ・サイエンス パーク	英国 ケンブリッジ市	約62ha	ロンドン市から北東80km
ソフィア・アンティボリス	フランス	2,300ha	ニースから22km, カンヌ から15km
メディカルパーク・ハノー バー	ドイツ ニーダーザクセン州ハノーバー市	30ha	
ルーバン・ラ・ヌーブ	ベルギー	150ha 開発総面積は 900ha	ブリュッセルから南30km
北京新技術産業開発実験区	中国北京市海淀区中関村	約5km ²	開発ゾーンとして設定され ている
新竹科学工業園区	台湾新竹市	577ha	台北市から70km, 車で1 時間弱

(出所)「筑波研究学園都市」パンフレット(茨城県)ほか、「海外のサイエンスシティにおける産学官連携の推進組織等に関する調査報告書」(国土交通省都市・地域整備局, 2004年3月)

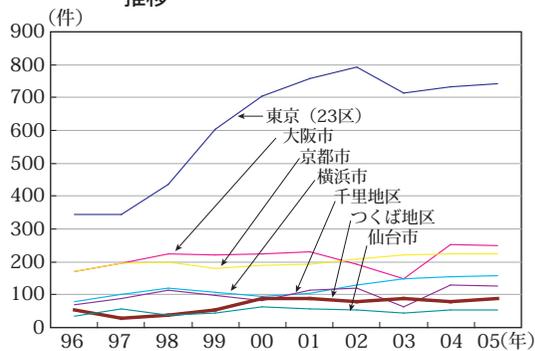
的な累積の大きさに比べて、わが国の研究者・研究機関・研究分野の横のつながりを生かしたダイナミズムが発揮できているのか、「科学技術立国」への貢献度は十分なのか、などの点について、批判的な声も聞こえてくる。

こうした「つくば」をめぐる現状において、本稿では「つくばサイエンス・アカデミー」が行ってきた活動を、その成り立ちとともに述べたいと思う。

1. つくばとの出会い

筆者がつくばを訪れるようになったのは、96年のことである。つくば国際会議場の建設計画が進み、つくばがコンベンション都市としても全国に売り出されていこうとしていたところである。当時、情報誌『CONGRESS&

第1図 都市別国際コンベンション開催件数の推移



(出所)「コンベンション統計2005」(独立行政法人国際観光振興機構)より

CONGRESS&コンベンション』(アイシーエス企画発行)の編集を担当していた私は、筑波大学学長だった江崎玲於奈先生にインタビュー取材をした。それが、つくばへの第一歩であった。取材の折、江崎学長は、国際交流とコンベン

ションについて、次のように話された。

「日本で国際学会を開くことのメリットの1つは、日本人がたくさん参加できることです。とりわけ、若い人が容易に参加できること。シニアの研究者ならあちこちに出かけることはさほど難しいことではないけれど、若い人はそう簡単には出かけられない。若い人の刺激になるということが、日本で開催することのいちばんの意義といえるでしょう。(中略)

国際交流—コンベンションへの投資を拡大し、国際会議を日本で開催する価値は十分ある。それは日本が様々な意味でベネフィットを得ることにつながり、それを世界に還元することになる。経済的な面のみならず、日本に来る留学生に、日本を本当に好きになってもらうことが必要です。日本を旅行し、日本でのコンベンションにもっと参加してもらい、『日本はよいところだ』と親しみを持ってもらうことはとても重要なことです」。

80年代後半から90年代にかけて、全国に多くの国際会議場、コンベンションセンターが開業し、「コンベンション都市」を標榜する自治体が多くあった。94年9月には「国際会議等の誘致の促進及び開催の円滑化等による国際観光の振興に関する法律」（コンベンション法）が施行され、全国に45の国際会議観光都市が誕生した（96年）。主に行政主導によるこれらの動きは、コンベンションによる経済波及効果や地域活性化を狙ったもので、世界的な傾向であった。コンベンションセンターを拠点に自らの地域性、アイデンティティを意識した、独自性のあるコンベンションの企画創出を考える地域も多くみられるようになっていた。

そのような状況のなかで、頭脳が集積する筑波研究学園都市に国際会議場ができるという話題は、他都市とは一線を画す全国でも比類ないコンベンション都市の誕生である、と

の期待を筆者は持ち、つくば取材に臨んだのだが、そのときは「筑波研究学園都市」の顔をよくとらえることはできなかった。

2. サイエンス・フロンティア つくば999 (SFT999) マルチ・ディシプリナリーな 企画創出型国際会議

江崎学長と次にお会いしたのは、97年8月だった。99年秋につくば国際会議場の開館記念自主事業として開催する「サイエンス・フロンティアつくば」(SFT99:後にSFT999)に、企画段階から手伝えることとなった。異なる研究分野を集めて「横断的交流を行う」ということの難しさを、この時点ではまったく分かっていなかった。そして、このときから筆者の「つくば探索」が始まった。

SFTの企画立ち上げにあたって、会議の組織委員長となられる江崎学長から寄せられた意見は次のようなものであった。

「会議の実行は、トップダウン式とボトムアップ式の2通りがある。後者のほうが盛り上がりという面では優れている」「SFTは国家的事業ではないのだから、あくまでもつくば中心でものを考えよう」「基本的には、研究交流を通じて筑波研究学園都市の活性化を図り、『つくば』を世界の科学技術拠点として発展させていくような起爆剤の事業としたい」。

SFTで何を取り上げるのか。つくばの持つ研究成果について、官民48の研究機関の企画担当者会合を重ねるなど、検討を重ね、取り上げる分野を生命科学（後に構造生物学）、脳科学、農業科学、材料科学（後に物質科学）、地球科学、情報科学（後に情報通信科学）の6つに分けることとなった。

97年暮れのプログラム委員に送った依頼状には、次の点が強調されていた。

「SFT99 は、筑波研究学園都市のアクティブな研究者の主体的な参画と、ノーベル賞受賞者を含む多数の世界的に著名な研究者の協力を得て創出する国際会議とし、ハイレベルで学際性の高いテーマ展開のもとに、日本、アジアはもとより世界の産・官・学の研究者が真に興味を持って参加できるものになりたいと考えております。本会議の組織委員会は、筑波研究学園都市の各研究機関を中心に、茨城県知事により組織された『つくば国際会議場推進協力委員会』で構成されており、会議の内容については、筑波研究学園都市の研究者自らの企画構成により、構築していく予定です」

3. 模造会議で効果を探る

プログラム委員会は、98年1月から計17回開かれた。なかでも6つの分野の部会

長が集まった第2回委員会は、SFTの骨格についての討議が4時間にわたって行われた。この日は、雪の降る日曜日であったが、筑波第一ホテルの会議室は、熱気であふれていた。鮮明なインパクトのあるスローガンをつくり、たくさんの人が集まる会議にしようと、テーマを「科学と技術の限界に挑む」とし、各部会で趣旨の確認や論点の絞り込みを行うこととなった。

また、6つの部会方式はインタラクショを生むのか、集まった意義をどこに求めるのか、集積効果はインタラクショを生み出すのかという疑問には、「模造会議」（プレ・コンファレンス）を開催し、その効果を探った。

学際的なテーマであるために、広報活動にも力を注いだ。つくばの研究者1万2000人を対象に、「SFTとつくば国際会議場のPRを兼ねたアンケート調査」を実施し、筑波研究学園都市の研究所長を招いた新年意見交換会も催した。

第2表 サイエンス・フロンティアつくば999（SFT999）の開催概要

名称	サイエンス・フロンティアつくば999（SFT999） —つくば国際会議場開館記念自主事業—
会期	1999年11月17日（水）～19日（金）
会場	つくば国際会議場
主テーマ	科学と技術の限界に挑む
サブテーマ	21世紀の科学・技術研究のWHAT, WHY, HOW
スピーカーが 強調すべき5原則	聴衆に興味と感動を覚えさせることを大前提とする (1) 研究の目的, 意義, 重要性 (2) 研究の方法, ステップ, スケール (3) 研究の特徴, 独創性 (4) 他分野との関連性 (5) 研究成果, とくに波及効果
6つの部会と座長	構造生物学部会（西村暹座長） 脳科学部会（伊藤正男座長） 農業科学部会（貝沼圭二座長） 物質科学部会（丸山瑛一座長） 地球科学部会（石田瑞穂座長） 情報通信科学部会（諏訪基座長）
主催	つくば国際会議場開館記念自主事業組織委員会, 茨城県
共催	つくば市, 土浦市, 碓氷町
後援	科学技術庁, 農林水産省, 通商産業省, 文部省, 科学技術振興事業団, 筑波研究学園都市研究機関等連絡協議会
協力	国際観光振興会

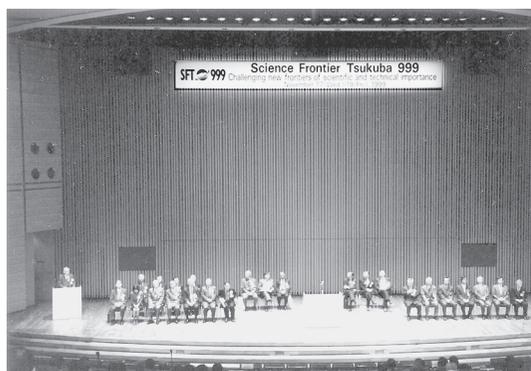


写真1 SFT999 開会式 (99年11月17日、つくば国際会議場)

意見交換会に参加したある研究所の所長からは、「独立行政法人化へのプロセス，採算の合わない研究や息の長い研究の冷遇化などの動きがあるが，それらを乗り越えて，いろいろな意味で形のある，文化というか，そのような世界に誇れる筑波研究学園都市というものをつくっていく。その過程で，このSFT事業をやっていききたいと思う」という意見をいただいた。それに応えた江崎組織委員長の「皆さんの発言を聞いて，こういう会議をする価値があるという確信を持ってきた。SFTを傍観者ではなく，参加者（パーティシパント）として盛り上げてほしい」という言葉が印象的であった。

2年3カ月に及んだ準備を経て，SFT999は99年11月17日（水）から3日間の会期で開催された。会議には，25カ国から1197人の参加があった。つくばにいる研究者数の10%を集めようという目標設定は，なんとか達成できたことになった。開催前に，つくばの研究機関はもとより首都圏や関西にも出かけ，委員の先生と一軒一軒訪ねては，学際的な開催趣旨を説明してきた成果でもあった。

そして，苦勞の末に実現した分野横断的な研究交流の機会を継続的に持っていこうと，最終日に「SFT999つくば宣言」が行われた。

それが「つくばサイエンス・アカデミー」の設立提唱だったのである。

SFT999の成果について，江崎組織委員長は開催直後の新聞紙上で次のように語っておられた。「会議の結果はこれから検討しなくてはいけないが，1200人の参加登録者があり，アピールすることはできた」（茨城新聞，99年11月20日付）。

4. 学会とは違う「つくばサイエンス・アカデミー」(SAT)

「つくばサイエンス・アカデミー」設立準備は，江崎玲於奈設立準備委員長のもと，当時，筑波大学名誉教授だった村上和雄先生が事務局長となって進められた。「つくばに個の文化を深く広く育てていこう」と呼びかけた設立趣旨には，江崎先生による次の言葉がある。

「新しいミレニウムを培い，新しい科学・技術のビジョンの創造と，このビジョンに基づく研究者たちの躍動的な研究活動，相互交流や社会活動の場として『つくばサイエンス・アカデミー』を設立することといたしました。（中略）考えてみますと，研究開発が萌芽的，先駆的，先端的になればなるほど，集団の力というより個の活躍により新展開がみられ，新天地が開拓されることは歴史の教えるところではあります。このつくばという土地に『個の文化』を確立することは，個人の創造力を思う存分発揮する風土を育成することになると信じます」

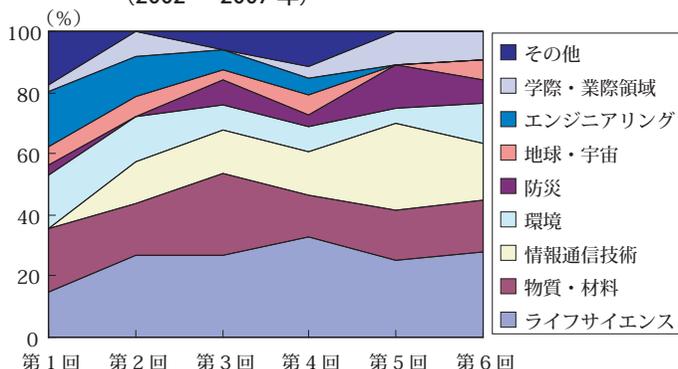
設立総会の日程を2000年11月16日とし，会員勧誘のために，つくばの研究機関への訪問を再開したが，今度は継続的な性格があるため，なかなかよい返事を得られなかった。これでは会員は100人も集まらないと落ち込んでいたところに，白川英樹先生のノーベル化学賞受賞のうれしいニュースが飛

第3表 つくばサイエンス・アカデミーの主な事業一覧

■2000年度		
つくばサイエンス・アカデミー設立総会	11月16日	
「リアルタイム地震情報伝達システム」に関するワークショップ	2月23日	
パネル討論会「連携融合はどのように進めればよいか—ITとナノを主題に」	3月2日	
ノーベル賞トーク「生体分子集合体の探究—私的見解」	3月9日	
つくばWAN国際シンポジウム	3月15～16日	国土交通省の主催, SAT共催
■2001年度		
第2回つくばサイエンス・アカデミー総会&SATフォーラム2001	7月13日	
ノーベル賞トーク「発明・発見のよろこびを語る」	7月26日	
カーボンナノチューブ発見10周年記念シンポジウム(CNT-10)	10月3～5日	NECの主催, SAT共催
ノーベル賞トーク「レンスラー工科大学のインキュベータで行われた学究の世界から起業への挑戦」	11月1日	
第1回つくばテクノロジー・ショーケース	1月29日	22の研究機関・団体が共催
研究者ディベート「遺伝子組換え作物, 遺伝子組換え食品 Yes or No」	2月22日	
■2002年度		
第3回つくばサイエンス・アカデミー総会&SATフォーラム2002	7月23日	
第2回サイエンス・フロンティアつくば2002(SFT2002)	9月20日	宇宙開発事業団の主催, SAT共催
—宇宙から何を学べるか, 考えよう—		
第2回つくばテクノロジー・ショーケース	1月30日	27の研究機関・団体が共催
■2003年度		
第4回つくばサイエンス・アカデミー総会&SATフォーラム2003	7月30日	
SATイブニング・セミナー Dec. 2003	12月1日	
「科学者・技術者がサムシング・グレートを感じるとき—宇宙・生命の研究からのアプローチ—」		
第3回つくばテクノロジー・ショーケース	1月30日	26の研究機関・団体が共催
国際ナノテクノロジー総合展(nano tech 2004)に出展	3月17～19日	会員有志が参加
■2004年度		
第5回つくばサイエンス・アカデミー総会	7月23日	
第1回江崎玲於奈賞・第15回つくば賞授賞式・受賞記念講演会	7月23日	(財)茨城県科学技術振興財団との共催
第3回サイエンス・フロンティアつくば(SFT2004)	11月14日	20の研究機関・団体が共催
—宇宙と生命: 未知にぞむ研究のフロンティア—		
第4回つくばテクノロジー・ショーケース	1月31日	26の研究機関・団体が共催
国際ナノテクノロジー総合展(nano tech 2005)に出展	2月23～25日	5つの研究機関との共同出展
■2005年度		
第6回つくばサイエンス・アカデミー総会&SATフォーラム2005	7月26日	
TXテクノロジー・ショーケース ツクバ・イン・アキバ2005	9月21～22日	26の研究機関・団体が共催
(第5回つくばテクノロジー・ショーケース)		
第2回江崎玲於奈賞・第16回つくば賞授賞式・受賞記念講演会	9月30日	(財)茨城県科学技術振興財団との共催
国際ナノテクノロジー総合展(nano tech 2006)に出展	2月21～23日	4つの研究機関との共同出展
SATイブニング・セミナー Mar. 2006	3月17日	
「気候変動と自然災害: 皆で防災力を高めよう」		
■2006年度		
第7回つくばサイエンス・アカデミー総会	7月31日	
SATフォーラム2006(つくば・東海・日立知的特区推進シンポジウム)	7月31日	茨城県との共催
第4回サイエンス・フロンティアつくば(SFT2006)		
真にイノベティブな研究をつくばから出すには—創薬を例に—	9月5日	20の研究機関・団体が共催
第3回江崎玲於奈賞・第17回つくば賞授賞式・受賞記念講演会	9月28日	(財)茨城県科学技術振興財団との共催
TXテクノロジー・ショーケース・イン・ツクバ2007	1月30日	24の研究機関・団体が共催
(第6回つくばテクノロジー・ショーケース)		
国際ナノテクノロジー総合展(nano tech 2007)に出展	2月21～23日	4つの研究機関との共同出展

(注) 隔月で開催されていた「ランチョンセミナー」は除く

第2図 つくばテクノロジー・ショーケース発表分野の推移
(2002～2007年)



び込んだ。設立総会はその1カ月後であったので、一気に盛り上がり、会員数は350人を超え、白川先生もお招きして、にぎやかに第一歩を踏み出すことができた。橋本昌茨城県知事も駆けつけてくださった。

「つくばサイエンス・アカデミー」の設立にあたっては、茨城県から2年間という期限つきで支援をいただいた。期待に応えるには実績を積んで広く知っていただき、社会に認めてもらうような活動をしようと関係者で話し合い、いろいろな事業の企画を練った。多分野の頭脳が集まり、研究者のネットワークがあるつくばでは、コンテンツを立ち上げるのは、そう難しくはなかった。こだわったのは、①学会とは違うこと、②専門外・一般に対して話をする、という2点で、つくばの研究機関、研究者の参加を呼びかけた。

5. 研究のフリーマーケット

つくばテクノロジー・ショーケース

今年で6回を数えた「つくばテクノロジー・ショーケース」(実行委員長:大蔭和仁・産業技術統合研究所)は、SATの看板事業として案内できるものになってきた。研究者の引き出しに眠っている研究のシーズやニーズを一堂に集めて皆で見せ合おうという研究者の

発案で、2002年1月から始まったものである。発表対象を組織単位でなく研究者個人とし、さらに研究者自ら説明することで、「つくばらしいイベント」の新鮮味が出たのではないかと思う。

準備にあたっては、毎回現役の研究者が実行委員となり、委員会を重ねて企画案を練った。コンセプトは一貫して「フリーマーケット」。(つくばの)幅広い分野の発表を集め、「つくばを見せよう」と、あえてテーマを絞ることはしなかった。

1分という口頭説明セッションは、今ではすっかり定着した。しかし、発表する研究者



写真2 ツクバ・イン・アキバ(第5回つくばテクノロジー・ショーケース)のベストインデクシング受賞者(2005年9月、秋葉原コンベンションホール)



写真3 TXテクノロジー・ショーケース・イン・ツクバのポスター発表風景
(2007年1月, つくば国際会議場)



写真4 TXテクノロジー・ショーケース・イン・ツクバの特別企画「つくば研究祭」の会場を見学する江崎玲於奈先生と柘植綾夫先生, 中央に大蒔和仁実行委員長

の側に立ってみると、ショーケースへの発表のモチベーション（優先度）は低いのが実情のようである。「他流試合への発表の価値」を認めてもらえればよいと思うのだが。

つくばエクスプレス（TX）が開通した2005年9月には、秋葉原で「TXテクノロジー・ショーケース ツクバ・イン・アキバ2005」が、本年1月には、つくば国際会議場で「TXテクノロジー・ショーケース・イン・ツクバ2007」が開催された。

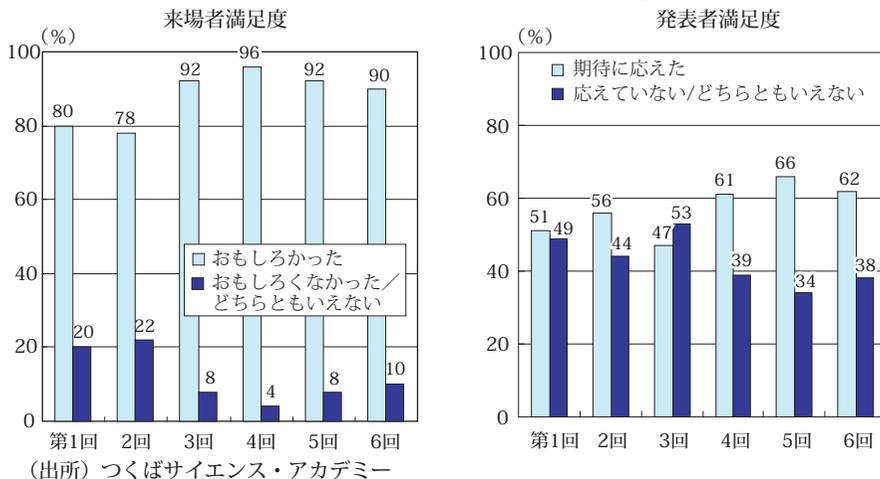
過去6回のショーケースの来場者と発表者の満足度を比較すると、来場者は8～9

割が肯定的な評価をし、発表者側の肯定的評価は6割前後である。

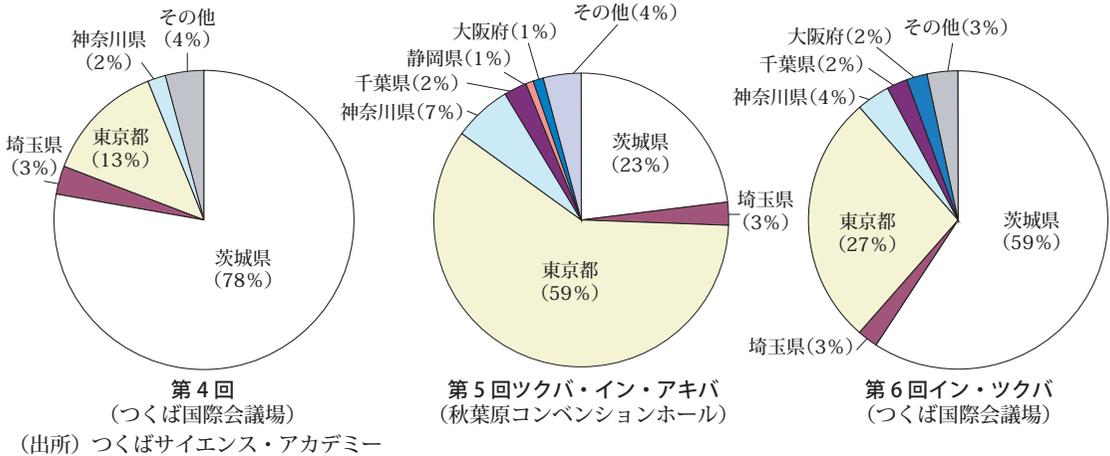
また、過去3回の来場者の都道府県別内訳をみると、TX開通後のつくばへの来訪者数は上向いており、TX開通効果は確実にあるようである。

2004年からは、東京ビッグサイトで行われている「国際ナノテクノロジー総合展」につくばの研究機関と共同出展してきた。「食、農、環境－ナノテクの挑戦」をテーマに、食品総合研究所、農業生物資源研究所、農業・

第3図 つくばテクノロジー・ショーケース 参加者の満足度（割合）



第4図 つくばテクノロジー・ショーケース 来場者の都道府県別内訳 (割合)



生物系特定産業技術研究機構、国立環境研究所、筑波大学とともに出展し、各機関はそれぞれの研究成果を、そしてSATはつくばテクノロジー・ショーケースで集めた研究の発表内容を紹介した。2005年の「ナノテック大賞 環境・エネルギー部門」の受賞は予想外のニュースで、その日の夜は関係者への連絡に大忙しだった。

6. 「異文化交流」の推進とは

以上の取り組みを振り返り、SATの設立準備から事務局の1人として運営にかかわってきた立場から、私見ながらSATの活動を整理すると、以下のような点があげられるのではないであろうか。

1つには、なかなか成立しがたい研究者・機関・分野・官民の「異文化交流」に関し、単発のプロジェクトでなく、(少なくとも)継続的に開催する実績をつくったこと。

次いで、「フリーマーケット」の称号にみられるようなある種のハードルの低さで、専門領域内でとどまりがちな研究交流のクロスオーバーの場を実質的に作り出したこと。

こうした成果の実現には、実施主体が有志による任意団体であるがゆえのフレキシビリティを確保できたことも、影響しているかもしれない。SATが試みてきた研究の「異文化交流」の“新しい”仕組みづくりのなかでは、「異文化交流」という機能を果たす場をつくりだし継続させていくリーダーと、プロデュース力・コーディネート力を備えた事務局の存在と役割は大きいと考える。その筆頭が江崎理事長であり、関係する理事・委員、事務局のそれぞれの熱意が、官僚的・縦割りになりがちな弊害を乗り越え、つくばにおける研究の横の交流を引き出したのではないだろうか。

写真5 国際ナノテクノロジー総合展2005で「ナノテック大賞 環境エネルギー部門」を受賞 (2005年2月、東京ビッグサイト)



しかし、活動の拡充に向けては、財政面での限界があることも確かである。これまでのSATの活動は、会員に向けた事業と、各研究機関や茨城県、つくば市に対して企画提案し実施してきた事業がある。会員規模に応じた活動にかじをきるのか、ショーケースのような「オールつくば」的な発想を持って今後も展開していくかは、筑波研究学園都市にかかわる茨城県、つくば市、そして各研究機関の関係者の議論が必要であると思う。

おわりに

「地縁・血縁のないつくばに、どうして、そんなに一生懸命になるのかね」との質問に、うまく返す言葉を持たないまま突っ走ってきたこの10年間。よくわからない大きな壁に

向かって、突きあたっては跳ね返されていたように思う。

世界最大規模のサイエンス・シティー「つくば」に立脚した、横断的な研究交流の場をつくろうという試みは、言うは易しだが、なかなか難しいものである。しかし、アイデアが出るとすぐに形になっていく「つくば」は、知的好奇心をくすぐる、とてもおもしろい地域である。SFT999の大イベント以降、ショーケース、SFTを継続して進めることができた背景には、関係者がともに築いた実績をそれぞれが意識し、連綿と引き継いで、培ってきた信頼のネットワークの存在がある。

TXが開通したつくばは、第3ステージ「都市の発展期」に入ったとのことである。アクティブな研究者有志で始まったこの「つくばの試み」が、新たなステージでさらに輝きを増すことを祈りながら、本稿を終える。

トピックス

特許庁、業種別の特許戦略指標

特許戦略の優れる企業の上位に、東京応化工業、日産化学工業、トクヤマ、東レ・ダウコーニング、信越化学工業などがあげられた。

特許庁はこのほど2004年の業種別特許戦略指標の上位企業の名前を公表した。特許戦略指標とは企業がどのくらい特許を出願し、査定されているのか、海外に出願しているのは多いのか、などの数値と企業の知的財産ポートフォリオなどを加味、指標化したもので、企業の国際競争力強化へ向けた特許戦略、わが国の特許審査の迅速化、知的財産政策の改革などに役立てていくのが狙い。

2004年のランキングは特許出願数（2004年実績）、審査請求件数（同）、平均特許査定率（2004～2006年平均）、グローバル出願率（2005年実績）をベースにまとめられた。

化学分野では東京応化工業が1位（総合

点64.8）、2位が日産化学工業（61.1）、3位森永乳業（60.0）、5位の日本触媒は特許件数が303件と他を圧倒したものの、グローバル出願率が50%下回り、ランクを下げた格好。

無機化学・ガラス・土石製品分野では第1位ニチハ（57.5）、第2位トクヤマ（50.9）、第3位日本ガイシ（50.7）、またプラスチック・ゴム・紙分野では第1位東レ・ダウコーニング（66.6）、第2位信越化学工業（58.1）、第3位住友ゴム工業（56.9）。

医薬品分野では第1位は塩野義製薬（69.5）、第2位アステラス製薬（67.7）、第3位大日本住友製薬（65.1）で、武田薬品工業は特許件数、グローバル出願率とも上位だが、平均特許査定率が他社に比較して低く、7位にとどまった。